

大阪公立大学(仮称)一般選抜 個別学力検査等

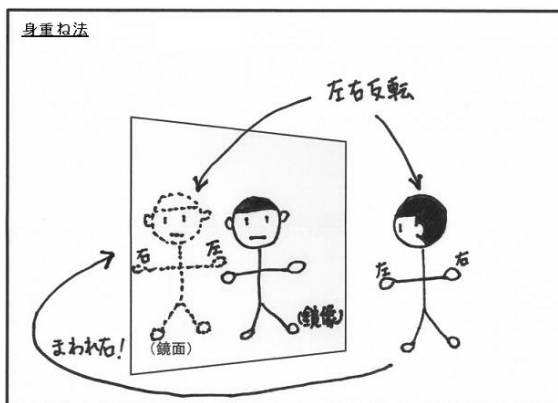
後期日程 その他 (小論文・文学部)

「解答例」

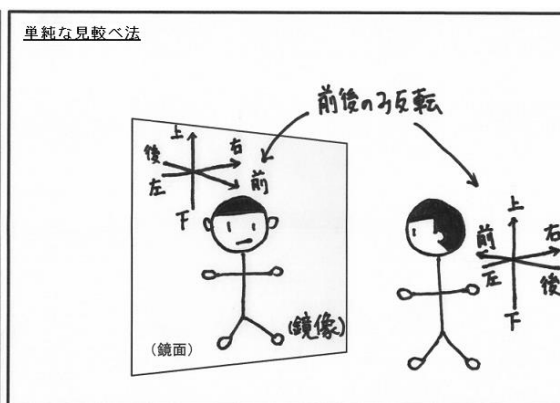
第1問

自分を鏡に写す場合を考える。身重ね法にしたがうと、私は鏡の中でまわれ右をしてから、私の鏡像にすっぽり重なると想像することになる。このとき、図(1)のように、私と私の鏡像は左右反転の関係にある。他方、両者を単純に見くらべると、図(2)に示すように、鏡面に垂直な方向にのみ逆転が起こっている。人体はたまたま左右対称であるゆえに身重ね法が自然であるように思えるが、見比べ法は十分に整理された考えである。(200字)

作図例



問1・図(1)

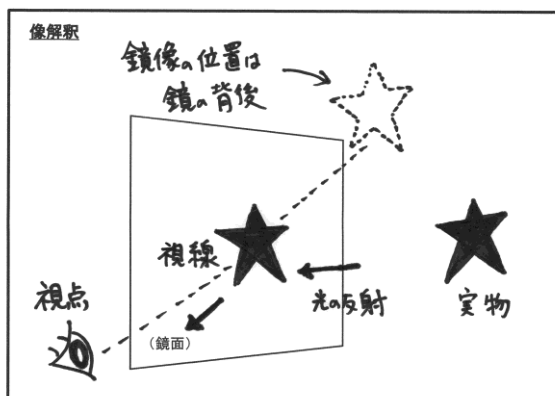


問1・図(2)

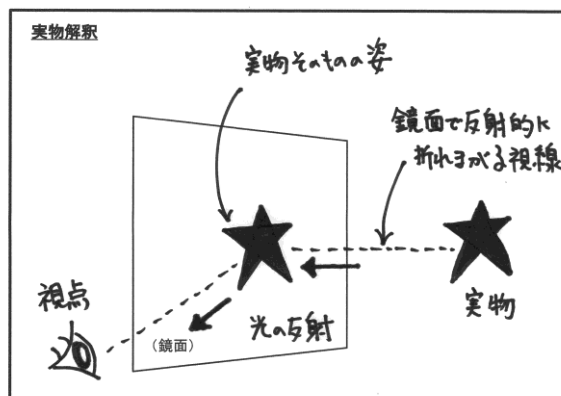
第2問

図(1)のように、鏡面の奥に見える鏡像は、客観的な物体配置における鏡の背後にあると考えるのが「像解釈」である。この解釈にしたがえば、鏡の背後には空気しか存在しないのだから、鏡像は確固とした存在をもたない単なる「像」とみなされる。それに対して、鏡に写る鏡像は、図(2)のように、鏡面で反射的に折れまがる視線にそった方向から見た実物そのものの姿であると考えるのが「実物解釈」である。たとえば、自分の顔を鏡に写す場合、自分は鏡のこちら側にいるのに対して、鏡の顔は向こう側にあると考えるのが「像解釈」である。他方、鏡のこちら側の顔を鏡面で反転する視線に沿って見ていると考えるのが「実物解釈」である。(295文字)

作図例



問2・図(1)



問2・図(2)

### 第3問

#### 解答例 (1)

像解釈は、鏡像をはじめとする光学像は表象の一種であり、客観的な物理世界ではなく意識に与えられる主観的な像であるという前提からはじまる。これはまさに、近代科学の根底をなす物-心二元論の思考パターンに他ならない。こうした考えを阻止するには、像解釈にとってかわる別の見方が必要である。それこそが実物解釈であり、この考えによると、光学像は主観的な像ではなく実物そのものの姿である。このような実物解釈が新たな常識となれば、像解釈が依拠する物-心二元論の考えは根拠を失う、このように筆者は論じる。

この考えに反して、像解釈から実物解釈への移行は物-心二元論を阻止しないと私は思う。第一に、我々はそもそも鏡像などの光学像について像解釈など受け入れておらず、むしろ日常的には実物解釈が正しいと考えている。たとえば、鏡に映る自分は誰かよく似た別人の像ではなく、あくまで自分自身の像であると考えている。第二に、我々はそれにもかかわらず、心と体は異なるという物-心二元論を受け入れ、鏡に映る自分の身体とそれを見る自分の意識は異なると考えている。それゆえ、実物解釈への移行が物-心二元論を阻止するという筆者の考えは誤りである。(496字)

#### 解答例 (2)

像解釈は、鏡像をはじめとする光学像は表象の一種であり、客観的な物理世界ではなく意識に与えられる主観的な像であるという前提からはじまる。これはまさに、近代科学の根底をなす物-心二元論の思考パターンに他ならない。こうした考えを阻止するには、像解釈にとってかわる別の見方が必要である。それこそが実物解釈であり、この考えによると、光学像は主観的な像ではなく実物そのものの姿である。このような実物解釈が新たな常識となれば、像解釈が依拠する物-心二元論の考えは根拠を失う、このように筆者は論じる。

さて私の考えでは、実物解釈はたしかに物-心二元論を脱却しているが、実物と像の区別までは放棄していない。たしかに、光学像は意識に与えられる主観的な像ではなく、物理世界の一部をなす実物の像である。とはいえ、実物の像もやはり像である。たとえば、鏡に映る自分の顔は誰かよく似た別人の顔ではないが、他人が見る実物の私の顔と同じではない。また、鏡に映した自分の顔と写真に撮られた自分の顔は異なるが、写真も実物そのものの姿ではなく別種の表象である。よって、実物解釈においても実物と像の二元論は維持される。(487字)